

チェルヌィシェフスキーの歴史哲学(Ⅲb)

武井勇四郎

共同体に反対する経済学上の偏見に批判を加えた『経済活動と立法』(1859), 『迷信と論理規則』(1859), 『資本と労働』(1860), 『ミル「経済学原理」露訳とその評言』(1860—61)の一連の諸論文は、ジョン・スチアート・ミルの『経済学原理』を抜きにしては考えられない。ミルの『原理』の初版は1848年であったが、チェルヌィシェフスキーが精読した版は第4版、1857年であった。『経済活動と立法』に初めてミルの名が出現し、『原理』の第5篇第1章「政府の機能一般について」、第10章「誤った学説を根拠とする政府の干渉について」、第11章「自由放任主義あるいは不干渉主義の根拠と限界について」が援用され批判されているところから見て、彼が全体を通読した時期は第4版の出版間もない1858年頃と推定しても大過あるまい。そしてその時点で彼はミル『原理』全巻を露訳する意を固めた、勿論、この決意は『ミル「経済学原理」露訳とその評言』(第1篇生産を除き他は抄訳)として実現されたことは述べるまでもない。このミルの大作の露訳に彼を駆り立てたものは、露訳の「序」の中で吐露されているように、まず第一に、『現代人』誌の精神で書かれた経済学書がロシアに不足していて、その上ミルの著作がフランスの俗流経済学者やそのロシアの亜流者のものと比べてスミス理論に忠実であった点にある。たしかにその通りであろうが、しかし、ミルの『原理』を思想的文脈の中で把えてみると、いくつかの点でチェルヌィシェフスキーの関心を喚んだものと見られる。周知の如く、ミルの父、ジェームズ・ミルは、ベンサム功利論の祖述者にして強い信奉者、「哲学的急進主義派」の指導メンバーであった。子のJ.S.ミルは父の厳格な教育を受ける20代にデュモン編の『立法論』

を読んでベンサム思想に心酔、これを酵母に自己の思想形成を開始するが、遊学先のフランスでサン＝シモン主義に浴しながら、フーリエ主義やルイ＝ブランの思想に強く影響され、それらを高く評価する。1848年に発表された『経済学原理』は、このようなミルの思想的歩み上の経済学的表現と見られる。このことは、この著作の副題 *Principles of Political Economy with some of their Applications to social philosophy* にも表現されている、つまり、経済学の諸原理だけにとどまらず、その諸原理を社会哲学に適用しようという野心的意図である。ミルは第1版の序文の中であらまし次のようにこの意図を開陳する。スミスの『国富論』以来、経済学は長足の進歩を遂げて来、他方社会哲学もスミスの時代よりも進歩を重ねて来た。よって『国富論』は時代の趨勢に合わず数多くの点で陳腐で不完全になっている、とりわけ当代の最良の社会思想に照してみればその感は免がれ難い。社会哲学の他の多くの部門と密接につながるのが当世の経済学であると。この社会哲学とは、言うまでもなく、社会主義、共産主義、社会思想等の別名である。事実、ミルは第2篇分配の第1章「所有について」において、私有財産制を社会哲学上の一問題として考察すべき新たな意識をもって、オーウエン、ルイ＝ブラン、カベー、サン＝シモン主義、フーリエ主義の諸説を述べた上で、特にフーリエ主義に強い共感を示している、また、第4篇第7章「労働者階級の将来」の中で、労働者同志の組合的共同組織に、非常に好意的な見解を表明した。

経済学と社会哲学とを結びつけようとするこのようなミルの意図が、ロシアにおける社会主義のあり方を探求していたロシアのチェルヌシシェフスキーに作用を及ぼさないはずはなかった。彼にとっても社会哲学に無縁な経済学は学問のための学問であると同義か、それとも記述としての経済学はフランス俗流経済学同様、資本主義の実証主義的弁護論に陥るのが関の山と考えられた。

『ミル「経済学原理」露訳とその評言』は、全く破格のスタイルをもち、『原理』の単なる輸入翻訳ではなく、ミルを含めたブルジョワ経済学一般——彼の用語で言えば「資本家の理論」——の破産宣告と彼の社会主義的経済学——こ

れまた彼の用語で言えば「勤労者の理論」——の積極的呈示という代物であった。その目差す目的は共同体擁護^{オプンヂナ}にあった。したがって、おびただしい評言を付したのである。最終篇（第5篇）の末尾に付けられた評言の内容は看過し難い重要性をもつ、——われわれは土地のありきたりの様式について語っているのだ。つまり、この様式によれば農民に属する土地は、個々人によって完全な相続所有に分割されずに、むしろ社会の全成員に平等に割り当てられる社会的財産としてとどまる。われわれによって数々の論文が共同体所有の擁護のために書かれた、それで再度ここでその優越性を列挙する必要はない。われわれはこう言いたいだけだ、もしこの制度がそれ自体有益であるならば、その保持にとって政府の配慮が必要だ、何故ならば、立法的保護なくしては、それは私的諸利益に抗して持ちこたえ得ないからである、と。見られる通り、チェルヌイシェフスキーの『原理』露訳の作業の意図は、最後の最後まで、ロシアの共同体擁護であったのである。事実を記述するだけで、方針を提起もしなければ指示もしないような学問は彼にとって無縁であった、彼いわく、〈経済科学は経済生活の医学である〉、医学は投薬だけが能ではない、薬をもはや必要としないように人間が守るべき条件をも人間に説明提示することであると。この彼の学問意識からしてもミルの『原理』の露訳は、単なる経済学上の知識の普及ではなく、あくまでも共同体に反対している改革=自由主義的経済学者の偏見の批判である、したがって、彼が一貫して提唱して来た歴史哲学の一環としての理論的作業である。一口で言えば、組合的同胞体実現のための理論工作である。もし、チェルヌイシェフスキーをただ単なるブルジョワ経済学の破産宣告者にすぎないものと性格づけるなら、それは事の一面しか把えていないことになる。眼目はロシアの進むべき進路であった。

ミルの『原理』を知る以前では、シスモンディの『経済学新原理』が彼にとって重きをなしていたが、ここにはベンサム功利論と自作農を理想とした社会主義とが流れていた。チェルヌイシェフスキーがシスモンディとミルをスミス、リカードの古典経済学派に数え入れたことは故あつてのことである。シス

モンディにもミルにもベンサム功利論の共通項が存在するからである。ベンサムは社会主義者ではなかったが、「最大多数の最大幸福」の分配論へのラジカルな適用は社会主義は不可避であるという論理的帰結に導く。ミルは生産の法則は人間の恣意によって左右されない物理的真理の性格をもつとし、他方、分配の法則は専ら法律と慣習という人為的制度に左右されるものとして、両法則を峻別した。そしてミルは社会主義は専ら分配に関する事柄と見ていた、とりも直さず所有の問題は社会哲学の関心事としたのである。後述するように、チェルヌィシェフスキーは自己の「勤労者の理論」の淵源として、労働（生産）に関してはスミスとリカードを、分配（所有）に関してはベンサムを筆頭に挙げるのである。ベンサムの功利論を導入した彼独自の「仮定的方法」は、分配に適用を受けると、社会主義を道徳的に要請する性格を強くおびる。ミルが社会主義を分配に関係させたこととチェルヌィシェフスキーの「仮定的方法」による社会主義の要請とは、共軌可能な要素があることを指摘しなければならない。ミルもチェルヌィシェフスキーも、フーリエのファランジュの構想を高く評価するのもこのことと無関係ではない。このことについては後述する。

以上見てきたように、ミルの『原理』の露訳の作業は、単なる思いつきのものではなく、また幾多の点で『原理』はチェルヌィシェフスキーの「勤労者の理論」の形成に刺激を与えたものである。これから彼の「仮定的方法」「勤労者の理論」「組合的同胞体」について順次論及してゆこう。

論敵を完膚無きまでに論破するには、自らの経済学的方法を所持することが不可欠である。彼にあってはこれは「仮定的方法 гипотетический метод」である。『ミル「経済学原理」露訳とその評言』に初めてこの名称が現われ、定式化されたが、しかし、この方法の利用による共同体擁護は既に、農民社会主義誕生の1857年の論壇月評№5に見られる。ミルの『原理』の中に、「……と仮定しよう」「……としよう」という言葉が散見する。特に第1篇第3章

「不生産的労働について」、第4篇第3章「産業の進歩および人口の増加が地代、利潤および賃金に及ぼす影響」の中に顕著である。もしかしたら彼がここからこの名称を思いついたのかもしれないが、その内実そのものは直接ミルに負うものではない。

ではいかなる理論的仕組をもっているのか。チェルヌィシエフスキーが明示するところではあらましようである。社会生活は無数の要因の相互に作用する複合体であるので、関心のある問題を明確にするためには単純な構成に変えなければならない。経済的現象や事実はまさしく複雑な複合体であるから、数ある要因の中から本質的な二、三の要因を変数とし、他を定数として関数（方程式）を作る必要がある。この場合数字は仮定の上で設ける。例えば、ある社会の人口を2,000名と設定するように。従来、確かに経済学は統計数字を操作してきたが、煩雑でその処理を誤っていた。＜経済学が人間の物質的福祉についての科学である＞以上、この物質的福祉の増減を目印に数を処理するのでなければならない。数の増大、減少を、社会にとっての利益、有益の増大、減少に還元することが肝心である。したがって、経済的現象のある要因の変化（変数）が社会全体の物質的福祉（利益、快、幸福）の最大をもたらすかどうかを数的な客観的確定性をもって測定することである。

見られるように、これはベンサム幸福計算、「最大多数の最大幸福」の算出法の、経済学への適用にはかならない。つまり、複雑な経済現象の本質的要因を取り出し、人間性の原理としての功利論に測定尺度をおいて、その現象の望ましき、善良きの測定値とするのである。特定の数字の設定そのものは事の本質には関係なく、数と数との関係、比、増減関係、つまり関数関係が問題なのである。この関数（方程式）は社会全体の幸福の総和の最大値を解く形で、解かれる。その拠って立つ哲学的地盤は、感性的存在としての人間の快、不快、益、不益の人間の自然（人間性）の重視であることは一分の疑いもない。「仮定的方法」の根柢にはベンサム、フォイエールバッハの人間学が横たわっている。チェルヌィシエフスキーはこの「仮定的方法」を自家薬籠中のも

のとして、戦争、不生産的労働、私的所有等々の社会に及ぼす影響を考察する際に適時用いているが、ここでは第2篇分配、第3章「生産物が分配されてゆく諸々の階級について」と第4章「競争と慣習について」に対する彼の評言の中で用いられた事例を取り上げ、そのもつ本質的性格を分析しよう。資本主義的階級分裂も資本主義的競争も存在しない一社会集団、つまり「勤労者の理論」が要求している「主人=生産者=受益者」の社会における労働時間と労働力の配分問題を解決するに当って、次のように述べた上で、仮定的方法を適用する、——理論「勤労者の理論」の要求に従う計算の基準は、計算される事物の本質そのもの、即ち生産物の価値でなければならない。生産者は、自分自身で働きながら、勿論、生産物の偶然的属性、価格を考えないであろう。何故ならば彼の生産物の大部分は全然市場に行かず、おそらく彼の手から出ないであろうから、そして自分に価格など求めないであろうから。自己自身の消費のために働きながら彼らは事物の根本的要因を考えるだろう。つまり、われわれは労働時間と労働力の一定量を割り当てるにあたって、様々な欲求を満足させるために様々な生産の間にもどのような比率でこれらの力とこの時間を配分するのが、われわれにとって何よりも有利であるのか。計算の基礎としてここで役立つのは、労働のどれだけの分量が、並みの必需品であろうと、より強い必需品であろうと、他の欲求の害とならずにある欲求の満足に振り当てられうるかを考察したその上での、諸欲求の分類である。もっと明白にするために仮定的ケースを考察しよう、と。次がその「仮定的方法」による計算である。

仮に今2,000人の住民を擁している共同体社会を設定する、勤労者を500人、1年の労働日を300日、1日の労働時間を10時間と定める。この共同体社会の総労働時間は $500_{人} \times 300_{日} \times 10_{時間} = 1500,000$ 時間となる。次の表は労働時間の三つの配分方式で、Aは一般に貧しい生活の社会、Bは良好な生活の、Cは奢侈品の沢山ある生活の社会である。

見られるように、A社会の810,000労働時間は予定されている総労働時間1500,000に満たないので、生活は窮乏を免がれがたい。B社会では尚300,000

チェルヌイシェフスキーの歴史哲学（Ⅲb）（武井）

社 会 別 欲 求 \ 労働時間	A		B		C	
	一人当り労働時間配分	社会全体労働時間配分	〃	〃	〃	〃
食 物	100	200,000	200	400,000	400	800,000
住 居	50	100,000	150	300,000	450	900,000
衣 服	25	50,000	100	200,000	400	800,000
家庭必需品	10	20,000	50	100,000	250	500,000
(小 計)	(185)		(500)		(1,500)	
社会的必要 (教育・道路等)	20	40,000	100	200,000	100	200,000
社会的愚行 (戦争・乱費等)	200	400,000	なし	なし	500	1000,000
総 計	405	810,000	600	1200,000	2,100	4200,000

時間残るので、この分を奢侈品生産に振り向けてもよいし、適度の良好な生活であるので1日の労働時間を10時間から8時間に短縮してもよい(500人×300日×8時間=1200,000時間)。A社会は民度が低い割合に社会的愚行が大きく、不釣合の労働時間の配分である。B社会は戦争や乱費（不生産的消費）のない生産的消費の社会である。さてC社会はどうか。B社会と比べて3倍も豊かな奢侈三昧と不生産的消費の強い社会である。しかし、予定されている総労働時間1500,000をはるかに超えていて、事実上不可能である。しかし、平等分配の社会なら不可能であるが、社会が三つの階級に分裂していて不平等分配なら可能なのである。つまり下表の通りならば、2,000人中200人（資本家，地主等）が

200人	C社会の生活	300,000 (1500×200)
400人	B社会の生活	200,000 (500×400)
1,400人	A社会の生活	259,000 (185×1400)
社会的必要		40,000 (A社会並)
	(小計)	799,000
社会的愚行		701,000 (C社会並)
	(総計)	1500,000

奢侈生活をし、400人（裕福な勤労大衆）が適度の生活をし、残る1,400人（水呑百姓とプロレタリアート）が最低生活を強いられる、よって階級分裂による社会的愚行が絶えないというわけである。

この「仮定的方法」に用いられる計算の性格をブルジョワ経済学が拠って立っている競争の原理に反対するチェルヌィシェフスキーの批判の中で調べてみよう。ミルによれば、発達の低い社会はさておき、高度に発達した諸国では産業社会は三つの生産の要件——資本、土地、労働——に応じて三つの階級に分裂している。これは生産物の分配に応ずるものであるが、彼によれば競争の原理と慣習によるもので、競争の原理のみが、地代、利潤、賃金、価格を決定するものではないが高度に発達した社会では慣習よりも指導的役割を果す、つまり商品の価格は競争の原理に完全に支配されるものではないが、大規模な取引とか、大都市の市場においては、市場価格として需要と供給の関係に支配される。確かにミルは三階級への社会の分裂と競争の原理は歴史的普遍性をもたないと主張したが、高度に発達した社会ではそれが特徴であるとした。チェルヌィシェフスキーは、このミルの見解の中、競争の原理の非普遍性を取り上げて、フランスの俗流経済学の言う *laissez faire, laissez passer* のスローガンを強く批判した。チェルヌィシェフスキーによれば、経済生活の一部分的形態の法則にすぎない競争の原理 (*laissez faire, laissez passer*) を普遍的原理とすることは、恰も、手の解剖学を解剖学一般と呼び、イギリスについての部分的研究を地理学全体と僭称するが如き手である。彼によれば、競争の原理による市場価格は、転売のための価格であり、ここに働く計算は、利益を個人的に取得するという打算である。対象そのものの諸性質、生産に消費された諸要因で考察される価値 *стоимость* は、競争の外的属性によって決まる価格 *цена* とは根本的に異なる。彼はそのもの自体の真の価値を測定する計算を〈経済的有益の計算 *расчёт экономической выгоды*〉と名付け、転売を目的にして市場価格を決定する打算 *расчёт* ——ロシア語は同じであるが意味内容が異なる——と峻別した。彼はこう述べる、——われわれが「競争」という概

念の替りに、〈経済的計算〉というような一般的概念を科学の一般の原理の中に導入するとき、科学は己れの基礎に特定の諸特徴を全くもたない、あれやこれやのケースの適用のために既製のどんな加工も受け入れないところの観念を獲得するのである、と。〈経済的有益の計算〉は重力法則に対する万有引力の如き経済的現象の普遍的法則であり、laissez faire, laissez passer の原理による打算をその特殊的ケースとした。経済的計算は競争の形式なしでも存在する形式である。つまり、生産物が売買のためにではなく、自己消費される如き社会、つまり、「主人 = 生産者 = 消費者」の自己管理の成立する組合的同胞体に通用するのが〈経済的有益の計算〉である。チュルヌィシェフスキーは経済的計算の原理としてこう述べる、——对比考査 *соображение*、*理知的考察 рас-судок*、有益計算 *расчётливость* とは一体 どのようなものか。すべての資料、すべての事実や事情の原因や蓋然的帰結の組立てである。まさにこの对比考査の力こそ、すべての要求と力と、外的自然と依存関係をもった人間の有機体全体との代理者である。まさしくそれをを用いてのみ人間は完全な人間となる。他のすべての力は部分的力である、有機体全体、事情全体を把えない一面的なものである。無論のこと、ある一つの資料によっては、資料の総体に照応したことは、常にほとんど得られるものでない、と。計算 *расчёт* というロシア語は、利益ということも含意している。*расчётливость* なる用語は、有益を算出する計算高さのことであるが、私利私欲^{Эгоизм}のみ追求する打算のことではなく、自利^{Эго}の追求が同時に利他のそれとなり、自愛が同時に他愛になる計算(理性)である。このような計算を、彼は、一個人やある一階級の自利の計算——重商主義的打算 *маркантильные расчёты* (複数形)——と区別して、社会的立場に立った計算 *общественный расчёт* (単数形) と名付けた。ここには *salus populi lex suprema esto* (人民の幸福が至高の法でなければならない) の原理が貫徹する。人類の利益と照応した計算規準 *норма расчёт* が、社会的福祉 *общественное благосостояние* の増大を目標とする経済現象の分析手段として確立される。人間一般の代表者でなければならない科学は、一般的理論を提出する場

合、人間一般にとって有利であることだけを自然的なものと認めなければならない、とチェルヌィシェフスキーは宣言する。「仮定的方法」は功利的人間学をその前提に秘めていると言わなければならない、一口で言えば「最大多数の最大幸福」のラジカルな貫徹と言わなければならない。先きの仮定的計算の表に再び戻るなら、B社会の労働時間の配分は、その社会の全構成員が平等に生産物を取得することであり、かつ生産的消費に生産物を用い、非生産的消費（社会的愚行）に用いない方式に基づいている。とりも直さずこのことの意味することは、社会の全構成員の幸福の総和の最大値をつくりだす対比考査、社会的福祉の最大値計算である。ベンサム「最大多数の最大幸福」は、分配論に適用されるなら、チェルヌィシェフスキー自身が言う如く、社会の総生産物を人口数で割った平均値に近い量を各個人が所有する如き分配原理となる。C社会では平均値以上の量を取得するのは600人で総人口の約1/3にすぎない、よってベンサムの功利の原理への背理であり、道德哲学的観点からすれば「悪」と裁定される。このように社会的福祉の増大を旨とする経済的計算とは、勤労者大衆の利益の増大のための計算のことである。後述する「勤労者の理論」の一つの特徴は平等な分配の強調による個々人の幸福の総和の最大化である。彼は「仮定的方法」はこの「勤労者の理論」によって要求される方法であるとするが、このことは、逆にその理論を数学的確定性をもって正当化するものであることは明白である。この方法が、特に分配論的性格を強くもっているので、分配の面から共同体的所有と分配の必然性を導出することが可能である、ただし、この導出は快を求め不快を拒否するという人間学的欲求論に、つまり、彼の言う人間的有機体オルガニズムの自然(本性)に強く依拠しているものであることは否めない事実である。ちょうどこの頃、彼が『哲学の人間学的原理』(1860)を発表し、ベンサムやフォイエルバッハの感性としての欲求論とベンサムの功利論を平民の階級的利害の擁護の立場から再改造していたことを忘れてはなるまい。彼の人間学の原理は、ブルジョワジーの理論でもないし、またプロレタリアートの理論でもなく、まさしく勤労者一般の理論であった。したがって、西欧資本主義

経済機構のもつ非人間学的欠陥を余すところなく剔抉し、暴露することにかけては相当の威力をもつ。だがしかし、資本主義的経済の運動そのものの分析に乏しくなることは免がれがたい。しかしこれは、チェルヌィシエフスキーの罪とすることは出来ない。何故なら、彼自身が正しく洞察したように、ロシアは西欧ではない、ロシアは資本主義国ではない、たった今、その経済運動にさしかかったばかりで、必ずしもロシアは西欧の資本主義路線に進む必然性はないからである。この点で「仮定的方法」は、ロシアの実状を非常に敏感に反映しているロシアの色彩をもつとも言えよう。「仮定的方法」は「勤労者の理論」と密接な関係にあるので、論述を後者に移そう。

チェルヌィシエフスキーの「勤労者の理論 теория трудящихся」は二つの理論の改造から構成されている、一つはアダム・スミスの労働価値説であり、他はベンサム¹の功利の原理である。前者は労働（生産）についての教理であり、後者はその生産物の分配についての教理である。彼がこの両教理をどのように改造し、両者を構造的に組み込んでいるかをそれぞれに解体してみよう。まずスミス理論（ミルも入る）から始めよう。

スミスの労働価値説から彼がいかなる必然的帰結を導いたかは、労働の本性と生産物一般と資本との関係いかなの究明に尽きる。チェルヌィシエフスキーはこう見る。生産活動は三つの要因、(1)人間有機体^{オルガニズム}、(2)人間外の自然対象、(3)生産用具から成る。労働は人間有機体の自然的活動の一つであり、人間有機体の諸欲求に応じて自然対象を改造する時、生産活動となる。労働は必ず肉体（筋肉）的労働と精神（頭脳）的労働との統一であって、両者は比重の差こそあれ、分裂した形では存在しない。あらゆる生産物は労働による所産であり、生産物が物的形態をとらない教育や医療も労働の所産である。経済学がいう労働生産物が専ら人間有機体の物質的需要（欲求）の充足として考えられるが、社会の物質的福祉の維持・増大に向けられる活動一般が労働と考えるのがよい。スミスは『諸国民の富（国富論）』で富 wealth なる概念を用いているが、この

概念は他の対象（物件）との関係で意味をもつ相対的概念でそれ自体の中に独自の内的尺度をもたない。それに引き換え人間有機体が幸福〔福祉〕であるとかないとかは、他との比較においてではなく、絶対的に сам по себе、人間の自然 природа человека において成立する、したがって、経済学の目的は、人間の物質的福祉 материальное благосостояние が労働によって生産される物と状態に依存する限りにおいて、有用な対象の生産と分配の諸条件の研究である。生産物の発生の根源が労働である以上、新たな生産のための手段となる労働生産物たる資本も労働の所産である。したがって労働の主体としての人間有機体を維持する食物、住居、衣服、燃料、労働対象としての生産材(原料)、労働手段としての生産用具、交通、自然力(土地、火力、水力、家畜力)も、新たな生産に不可欠である以上、すべて資本のカテゴリーに入る。これらすべては労働生産物である。社会の物質的福祉を維持・増大させる労働は有利な労働、その逆は不利な労働であり、よって教育・科学に向けられる労働は有益な労働、奢侈品生産に向けられる労働は不利益な労働である。生産的消費は生産のための消費でこれは人間が有機体である以上不可欠であるが、奢侈品消費の如き不生産的消費は資本の増大に繋がらないので、それを生産する労働は不利益な労働である。別言すれば、生産に不可欠な必需品は資本のカテゴリーに入るが、奢侈品は生産過程に入らずに消費されるから資本ではない。「資本」が、ここでは社会の福祉にとって有益な労働生産物であるという規定を受けるので、労働を搾取するという資本主義的意味を失う。資本の増大は物質的福祉の増大ということと同義となり、貨幣はそのものとしてはどんな資本も構成せず、購買力の表現の役目しか果さない。チェルヌィシェフスキーはスミスの労働価値説から労働と資本との関係についてこう述べる、——科学の根本的観念は……人間的観念からして労働が生産の唯一の源泉であるという点にある。人間がそれによって生産に参加するもう一つの要素、つまり資本はただ労働の変形にすぎない、しかもこの変形は非常に束の間のものであり、急速に消える。何故ならば労働を通じての絶えざる再生産によってのみ支持され、事の本質上、資本を

創造もし、保持もする唯一のものである労働に対して、資本はいささかの独立性も持ち得ないからである。このことからわかるように、労働にたいする資本の優位を認めるばかりか、せめて何がしかの独立性を資本に帰するという要求は、正常な経済秩序からの偏向と見做さなければならない。その起源からしても、資本は事の本質上、労働の帰属物 принадлежность 以上のものではない、と。そして彼は労働価値説の必然的論理的帰結としてこう述べる、——人間的観点からして、すべての生産物はその発生を労働に負っている。したがって、すべてそれは、それを創造する有機体そのものの帰属物をなすのでなければならない。もし、生産物の創造に人間有機体一つでなく、多くのそれが参加したのであれば、生産物はそれらの各々が生産物の創造に投じた労働量 количество труда に比例して、それらの間に分配されなければならない、と。この生産物の社会主義的分配についてスミスは述べなかった。この点でスミスは誤りを犯したのであるとしてこう彼は述べる、——スミス理論が生産について語っているすべて立派なことが、実を結ばずにしぼんでしまい、そして分配理論もその理論の中では厳密な科学的分析の結果として現われるのでなく、十分ばやけた旧習の叙述として現われている、と。チェルヌィシエフスキーの評によれば、アダム・スミスは自己の原理から必然的に出てくる論理的帰結を予想しなかったし気付かなかったのである、何故ならば、スミス理論は歴史に登場した当時の中産ブルジョワジーの利害の表現であって、まだ歴史の地平線下にいた勤労人民（平民）の要求の表現ではなかったからである。ところで『国富論』（1776）の出版から50年経過した時点から、歴史はいくつかの歴史的大事件を経て大きく変貌した。フランス大革命が起り、サン＝シモンが出、フーリエが出、7月革命が起り、オーウエンが出、チャーチスト運動が起り、2月革命が起り、ブルードン、ブランキ、ルイ＝ブランが輩出した。特に1848年革命は決定的重みを歴史に極印した、勤労者大衆が歴史の舞台に雄々しく登場したからである。既にチェルヌィシエフスキーの立場はスミスのそれと違って勤労大衆一般、平民の利害擁護の立場である。彼のこの立場から見れば、スミス理論の論理的必

然的帰結はこうである、——個人的利害関心は生産の主要な原動力である。生産の成功の鍵をにぎる生産のエネルギー *энергия производства* は、生産への個人的利害関心の参加度に常に厳密に比例しているものである。……個人的利害関心とはどういう点にあるか。それは事物を所有しようとする志向にある。事物の完全な所有は事物にたいする所有権と呼ばれている。したがって、個人的利害関心は事物の所有によって完全に満たされる。それ故に、労働のエネルギー、即ち生産のエネルギーは生産者の生産物にたいする所有権に相応している。このことから帰結することは、生産物がその生産のために労働をふり絞った人の所有物となる時に、生産が最も有利な諸条件のもとにあるということである、換言すれば、労働者は彼の手でなった事物の所有者でなければならない、と。

以上のようにチェルヌィシェフスキーはスミスの労働価値説から生産者が生産物を所有すべきであるという帰結を導き出したが、今度は生産価値の最も有利な分配方式としてベンサム「最大多数の最大幸福」の原理を分配論に適用するのである。一定の社会の価値総量を、その社会の人口数で割って得た平均値に、出来るだけ近いものを社会の各人が所有するというのが、この最も有利な分配方式なのである。これは先に「仮定的方法」で述べたように社会の最大多数者が平等の社会的福祉を得るという〈経済的有益の計算〉の数学的確実性をもった帰結である。彼によれば、彼自ら発見した二つの原理——スミスの労働価値説からの所有の帰結とベンサムの功利論の適用による分配論——は同一の事実を目差すまったく同一の理念を異なった面から表現したものにすぎないのである。スミスからもベンサムからも出てくる帰結は一つであって、それは価値の生産よりもむしろ価値の分配の新たな法則である。このことを彼自身強く意識していて、勤労者の理論はその主な注意を価値の分配にかんする課題に向けると明言している。したがって「仮定的方法」が「勤労者の理論」によって要求されているものであると彼が言い、またこの「仮定的方法」にベンサムの「最大多数の最大幸福」が働いていると言うのにも、それなりの理由が

あるわけである。「勤労者の理論」が全く生産過程を無視したわけでないが（このことについては後述する）、分配方式に重点を置いたことは事実である。そして彼の組合的同胞体のカテゴリー「主人＝生産者＝受益者」からすれば、交換過程はあらずもがなのものである。何故ならばこの「同胞体」にあっては、生産物は商品であってはならず、価値は転売のための価格と根本的に異なってそのもの自体として評価されるものであるから。彼の考えでは、労働は価値をつくる、しかし消費を目的として価値をつくるのであり、消費は消費で価値の分配方式に基づく、よって経済学の研究の根本的対象は分配の理論になる。したがって、先きに取り上げた、「仮定的方法」による労働時間と労働の配分の事例でもわかるように、「勤労者の理論」は、生産的労働と非生産的労働、生産的消費と非生産的消費との関係の考察において明確にその性格が現われてくる。ミルは生産的労働を物質的対象に体现され、永続的効用を創造することに使用される労働と定義し、そして非生産的労働を物質的富の創造に終らない労働あるいは享楽に終る労働と定義したのに対して、チェルヌィシェフスキーは生産的労働を人間の福祉に必要な生産物がその労働の成果であるような労働と定義し、その成果によって福祉が増大しない労働を非生産的労働と定義した。そしてミルの見地に全面的に賛意を表した上で、人間有機体に不可欠な必需品生産を生産的消費のための生産とし、奢侈品生産を非生産的消費のための生産と呼んだ。その上、功利的立場から、ミルの「生産的」「非生産的」なる概念を「有利な」「不利な」の概念に変えた。後者の概念は「勤労者の理論」にとって特徴的である。いまかりにある社会の労働総量が一定だとすれば、奢侈品生産により多くの労働量を振り当てれば、必需品生産の労働量が減り、社会人口は浪費的性向をもち必需品に苦しむ。したがって、まず始めに必需品生産、しかる後に奢侈品の生産、まず始めに物質的福祉の満足、しかる後に精神的福祉の満足、——これが労働量の合理的配分である。つまりこれが、〈経済的有益の計算〉である。誰のための「有益」な計算か、この問いに対してチェルヌィシェフスキーは答える、——経済学が科学という名称を要求する

ならば、勿論、一般的観点から考察することで、ある一部の集団ではなく、社会、民族、人類の利益を考慮しなければならない、と。この有益の計算の立場から彼は非生産的消費を専らとすることは一国の福祉の増大を阻害しているとしてこう述べる、——生産的消費に対しての非生産的消費、ないしは、有利な労働に対しての不利な労働の、どんな一時的ですらの拡大も、こうして有利な消費から不利な消費にとりかけておいた生産物の総額よりも、一国に大損害をもたらす。何故ならばこの事実によって既製の労働生産物が破壊されるだけでなく、しかし、もっと重要なことは、有利な労働を継続する手段が奪い取られるからである、と。つまり非生産的消費は、生産物を創造することはおろか、過去の労働生産物（資本）を喰いつぶしてしまうというわけである。ここには非勤労者の非生産的消費が一国の福祉の減少をもたらすということが表現されている、と同時に、当時のロシアの生産力の低さが表現されているのである。禁欲は社会的福祉（資本）蓄積の有力な要因である。チェルヌィシェフスキーの禁欲主義はロシアの近代化への道の道徳的表現である。以上のことから、ベンサム功利論が後進国ロシアの近代化への理論の一つとしてラジカルに変容を受けていると言わなければならない。

スミスとベンサムの両理論のラジカルな変容によって導出された「勤労者の理論」は、あるべき経済組織の様式として「主人＝生産者＝消費者」、あるいは同じことだが「勤労者＝所有者＝受益者」という組合的同胞体の原理 принцип товарищества^{オプシチナ}を提示する。この原理は、共同体即時廃止を提唱した改革＝自由主義経済学者を批判した『土地所有について』（第2論文1857）の中で、＜農村経済の成功にとって所有者と労働者とが同一人であるような土地所有形態が、最高の形態である＞として、既に提示済みのものであるが、『資本と労働』と『ミル「経済学原理」露訳とその評言』の中で、更に一般的原理として練り直されている。チェルヌィシェフスキーは、ミル『原理』第2篇分配の評言で次のように一般的特徴を述べている、——われわれが数え挙げた国民的福祉の

諸条件の一つも、一定の経済的組織なしでは不可能である。一例をあげると、生産の理論の中でわれわれが見たように、その成功のためには各労働者〔勤労者〕が主人であるような形式が必要である。そして生産経済の単位は、数百人の労働者が必要とされる巨大な規模をもたなければならない。したがって、生産組織の形式は、各企業には一人の主人もおらず数百人の労働者がいるが如きの、また誰も主人以外としては事業に関係しないが如きの、別言すれば、関係ある人すべてが関係している限りでは、その事業の主人であるが如きのもでなければならない。今やわれわれは満足に値する経済的計算の諸条件の中に、ちょうど同じような要求を見出すのである。その要求は、各消費者に用いられる生産物の精確な価値、生産に用いられた労働力の量が知られている時にのみ可能であるその当のものであり、そしてこのことは生産者たる主人にのみ知られ得ることである。したがって、生産物の各消費者はその主人＝生産者でなければならない。そして労働の結合の原理からすれば、各人に必要とされる全生産物ばかりか、これらの生産物の一つたりとも、個々別々に、一人間の仕事の産物であってはならない、むしろその生産においては、数十や数百の手を通じて行なわれなければならない（生産的操作が最も単純な要素に細分化されればされるほど、それだけ生産は成功裡に進む）。したがって、ここでも個々の生産物の各々の主人である替りに、様々な人間的要求に応じて様々な生産物の生産全部にわたって従事する大多数の人間の統合〔соединение множества людей〕が要求される。しかも、労働する各参加者が経営の資格をもった共同参加者〔соучастник〕となるようなそういった結合〔сочетание〕が要求される、と。別の箇所でも更にこれを要約して次のように述べる、——生活様式の改善に導く思想像の主な特徴をわれわれは既に知っている。それは次の諸点にある、——労働を商品にすべきでないこと、人間が他人のためではなく、自分のために働く時にのみ首尾よく働くということ、自尊心は独立した主人の状態によってのみ培われるということ、したがって主人になった時にのみ労働者が然るべき福祉を追求するであろうということ、これと相俟って、労働の結合の原理と生

産諸過程の性格が非常に大規模な生産単位を要求する、そして生理学のおよび他の自然的諸条件は、この単位の中で非常に種々様々な生産の結合を要求するという、よってもって個々の主人=労働者は同胞体において団結しなければならないということ、これである、と。チェルヌィシェフスキーはこの組合的同胞体の原理を資本主義経済制度およびブルジョワ経済学（「資本家の理論」）の批判の総決算として提示しているものであるが、ここで挙げられている諸特徴、「主人=生産者=消費者」の概念、労働の結合、大規模生産、交換過程の消滅等について順次解析してゆこう。

「主人=生産者=消費者」の概念はスミスとベンサムの両理論からの論理的必然的帰結であるが、組合的共同組織としての同胞体の経済的単位の構想は、フーリエのファランジュの構想と同型写像であるとまず最初に述べておこう。フーリエのファランジュに同胞体のプロトタイプを求めた理由にはいくつかある。その主なものは、ミルの『原理』第2篇分配第1章「所有について」と第4篇第7章「労働諸階級の将来」に述べられているミルの社会主義と共産主義と労働者間の共同組織についての見解と、10年前、ペトラシェフスキー会員ハヌイコフを通じての学生チェルヌィシェフスキーのフーリエ思想の受容とである。ミルの分類によれば共産主義とはルイ=ブランとカベールとオーウエンであり、社会主義者とはサン=シモン主義者とフーリエ主義者のことであり、前者は土地および資本の社会的共有と労働とその生産物の絶対的平等を主張する、それに対して後者は私有財産制も相続も廃止するものでなく労働と並んで資本にも分配を認める。ミルはこの両者の教説を比較して共産主義よりも社会主義の方が実現性があるものとする、つまり、共産主義はただ観念上で存在するもので、社会の労働を各成員に公平に割り当てることは実現不可能であり、更に、各人が社会全体に絶対的に隷属し、社会全体によって監督される結果、すべての思想と感情と行動の均一化を招き、人間性の多面的開発と趣味や才能の多様性の欠如をもたらすはしないかとした。これに対して、ルイ=ブランのスローガン「各人は自分の能力に応じて生産し、自分の欲求に応じて獲得する」

よりも、サン＝シモンのスローガン「各人に能力に応じて仕事を割り当て、各人の功績に応じて報酬を与える」方が、人間の利己的本性とマッチしていて現実性があるとした。しかし、サン＝シモン主義にあっては数人の指揮者を選出してこのスローガンの実施を企てるが、ミルによれば、これは社会の全構成員に平等の正義を配分する如きもので至難の業である。これに対してミルは、フーリエのフェランジュの構想に二つの点で高い評価を与えている。一つは生産物の分配に際し、労働のできる人もできない人にも最低限度の生活資料を保証した上で労働と資本と才能のそれぞれの要素に応じて分配するという点で、他は、このフェランジュにおいては有閑階級が存在しないので他人のために労働する必要はなく世間から恥ずべき労働とされる労働がない、またすべての労働を社会集団の手で行うので労働はすべて魅力ある労働、魅力ある仕事につくことになる、という点で。ミルが前者を評価するのは、私有財産制を一挙に顛覆しないで人間の能力と仕事の業績を十分に認めるからであり、後者を評価するのは、資本家と労働者との共同組合（協同組合）、労働者同志間の共同組織（生産および消費の共同組合組織）がこれからの労働者の労働様式とみていたからである。ミルは「労働諸階級の将来」の中であらましく言う。労働者は資本家に従属保護を求めることから自立する傾向を持ち始めており、教養を身につけ労働者人口を制限することによって自らの将来を拓き開くことができる。労働者階級はいまや一大勢力を持って来ており、従来の雇傭関係に満足しなくなっている。人間歴史の進歩において人類を雇傭者および被雇傭者という階級に分けておくことが永続的であるとは考えられない。農業において自作農を推奨できるが、大規模の工業生産が採用されている処では資本家と労働者とが共同利害をもち得る共同組織 *association* と労働者間の共同組織を創ることである。後者は労働者自身が経営のための資本を共同で所有し、自身で選出し、また罷免しうる支配人の下で労働するところの、労働者自身の平等の条件をつくる共同組織である。協同組合の原理は、労働の生産性を高揚させることができる、何故ならば、ここにあっては賃金労働者として最小の仕事をするこ

なく、一集団の中の労働者として最大の仕事をするように生産的エネルギーが刺激されるからである、と。

チェルヌイシェフスキーがミルのこのような見地に何もかも賛成したわけではないが、学生時代、フーリエの『普遍的統一の理論』（1841—43）を通読してファランステールの構想と魅力ある労働 *le travail attrayant* に共鳴したので、ミルのフーリエ的社会主義の傾向に共感を抱かざるを得なかったことは確かである。また彼はフーリエの見地に何もかも賛成したわけではないが、サン＝シモン主義の社会主義よりもフーリエ主義のそれの方が経済生活にコミットしていると見たのである。彼によれば、社会主義の本質がとりわけ経済生活に関係するのに、サン＝シモン主義にあっては経済的課題が曖昧な熱狂や〈愛〉の説教にとって替って、経済生活ではなく、心の生活が優位を占めていた（『新キリスト教』（1825）のことを指す）。それに反してフーリエ主義は直接に経済的側面を扱っていた。しかしフーリエの体系には天文学、地理学、心理学と共に、地球の宇宙生活、家族生活、教育の問題も入り、その全学説の根底には心理学がおかれている（『情念論』のこと）。そしてまだエンテクロペディア的性格、ないし、哲学的性格をもっている。とはいえチェルヌイシェフスキーの同胞体の構想はフーリエのファランジュの構想と同型写像の面を強くもっている。例えば、2,000名近くを経済的単位とする如きはそうである。なかでも彼はフーリエの「魅力ある労働」に強い関心を示した。ファランジュにおける労働はすべて魅力ある労働となるが、同胞体にあっては「労働の不快感」は解消するのである。この点についての分析に移ろう。

労働が、勤労をしている人間のうちに惹き起す不快な感じは、労働と名付けられる活動そのものの本質から起るのではなくて、むしろ現在の社会状態のもとではこの活動に伴うのが普通であり、別の経済機構のもとでは取り除かれるような偶然的な外部的諸事情から起るとされる。つまり労働そのものは、もともと快適な活動、つまり魅力ある活動であるが外的な事情で不快にされるという説である、——これはフーリエの説である。チェルヌイシェフスキーによれ

ば、これが全くの真理であると今のところ証明できないが、少なくとも現在の知識の水準では以上のように言って差支えない。何故ならば次の三つの条件が満たされる時、労働は常に快適なはずであるから、1.余り強い外的妨害が労働を妨げないとき、2.人間が外部からの強制によってでなく、彼自身にとって労働が必要であり、または有用であるという自覚をもって労働するとき、3.人間有機体に有害で有機体を破壊する疲労なしで筋肉が労働を行う程度内に労働時間がとどめられるとき。そしてこれを約束するのが一重に合理的な経済制度であると彼は言う。労働はもともと不快でないという論拠を彼は人間有機体オルガニスムのもつ活動性に求めた。自然の一部としての人間有機体は特異な生体であって、一定の活動を営むが、労働活動は活動の一形態であり、それは眼、耳、口と同様、自然改造する筋肉器官の活動であって、過不足のない適度の活動である場合、常に快をもたらしものである。よって労働の不快さの根源が労働者がその下で働く経済組織にあり、とりわけそこに支配している生産物の分配方式にあるとするのが彼である。したがって家父長的経済制度や、西欧の資本主義的経済制度に起因する不快な労働が、「魅力ある労働」になるための最大の前提は、「主人=生産者=受益者」を保障する組合的同胞体でなければならない、という結論が出る。「勤労者の理論」はフーリエの「魅力ある労働」の概念を「主人=生産者=受益者」のカテゴリーによって自らの中に見事に組み込んだのである。

チェルヌィシェフスキーは、更に「魅力ある労働」概念に加えて、資本主義的生産に伴う労働の分割 *разделение труда*、仕事の分割 *разделение занятий* による人間有機体や人間能力の畸型化の解消の問題を提起している。アダム・スミスは生産力の増大の最大の要因は労働の分割〔分業〕であると高らかに唱った。チェルヌィシェフスキーによれば、労働が分割されていない経済生活の低い時代では、同一人がすべての工程の生産活動にたずさわっていて人間有機体の諸々の器官が均一に活動し、ある特定の器官だけが働いて過度の偏頗な活動に陥ることのない健康な有機体であった。ところが、一般に生産過程の改善・

改良に伴い、また特定の機械の導入により、要求される労働は一面的、跛行的となり、人間有機体の活動に不快を惹き起した、またある特定の器官のみの酷使により異常な発達をとげ、他の器官が退化するという有機体の畸型化現象が出現した。統一されていた肉体労働と精神労働は分裂し、知的技術労働者と機械的肉体的労働者へと分裂する。そして高度の労働分割は単純な細分化された操作に進むので賃金低下に波及し、労働者階級は経済的にも零落する。ところで、社会的福祉（富）を増大させるには労働の分割は不可欠である、——これは真理である、反面高度の労働の分割は必然的に人間有機体の畸型化をもたらす、——これも真理である。これはいわばアンチノミーであるとチェルヌイシェフスキーは認める、と同時にこれを解決する。彼によれば、高度の労働分割は、実は逆に、同一人が様々な操作に従事する可能性を作り出しているはずである、というのは操作が単純化すれば短時間に幾つもの仕事を修得しやすいから。しかしこれを許さないのは経済機構のせいであると言う、——われわれは差しずめ労働分割の原理が、それ自体としては人間有機体の生理的諸要求に非常に合致することを知っているだけだ、したがってこのことから結論できることは、もしも現実に衛生の諸条件に反するなんらかの生産形態があるとすれば、人間の健康にたいする害は、労働分割の原理によってではなくて、その生産形態によってもたらされる、つまり、労働分割の本質によってではなく、その不首尾な、一面的適用によってにすぎない、ということである、と。彼は、労働の結合 *сочетание труда, сотрудничество*、あるいは様々な仕事の結合 *сочетание разнообразных занятий* という概念でこのアンチノミーを解いている。〈労働の結合〉、〈仕事の結合〉という意味内容を、社会的〈分業〉にたいする社会的〈協業〉とするのは、チェルヌイシェフスキーの言わんとすることと反する、何故ならば、同一の労働者、同一の個人が農業の仕事も、工業の仕事も従事するということであるから。逆に *разделение труда* は社会的〈分業〉の意ではなく、一労働者の労働の分割の意である。チェルヌイシェフスキーによれば、同一勤労者における労働の結合は、勤労者の健康の保

持と強化をもたらすばかりでなく、病弱な勤労者を健康にし、愚鈍な勤労者を明敏にする、そのことによって全体としては生産に巨大な利益をもたらす。チェルヌィシェフスキーの労働の結合の見地は、マルクスが『ドイツ・イデオロギー』の中で述べた全体的労働の回復の見地と同趣である。マルクスは、労働の分割 *Teilung der Arbeit* は、階級分裂の社会にあっては全体的人間を「分部人間 *Teilmensch*」に転化させるものとみ、その止揚は共産主義社会における全面的な多種多様な労働にあるとした。マルクスはこう言う、——共産主義社会では、各人が一定の専属の活動範囲をもたずどんな任意の部門においても修業をつむことができ、社会が全般の生産を規制する。そしてまさに、それ故にこそ私はまったく気のむくままに今日はこれをし、明日はあれをし、朝には狩りをし、午後には魚をとり、夕には家畜を飼い、食後には批判をすることができるようになり、しかも猟師や漁夫や牧人または批判家になることはない、と。チェルヌィシェフスキーは言う、——仕事の多様性において、労働者はより広い判断力をもつことになろう、彼の知力は仕事によって発達するであろう、彼の全活動が機械性に至るまでに単純化された一操作に制約される場合に鈍化するようには、鈍化することはないだろう、と。彼は「主人=生産者=受益者」の組合的同胞体が、この畸型化した、機械にまでなりさがった人間が、人間としての人間そのものに回復することを保証すると断じたのである。このような全体的労働による全体的人間の回復の見地はミルにはなかった。

＝つづく＝

使用テキスト

Н. Г. Чернышевский: Полное собрание сочинений, в пятнадцати томах,

Дополнительный том, 1939-1953.

Государственное издательство художественной литературы, Москва.